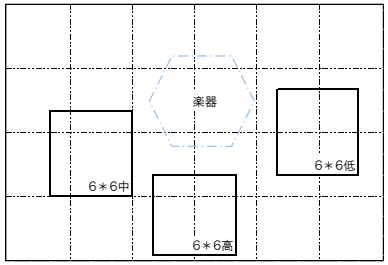
音楽劇

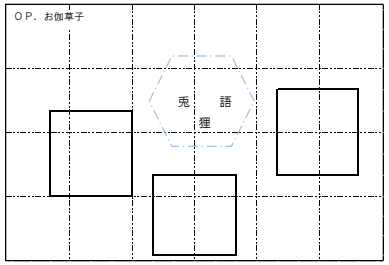
カチカチ山

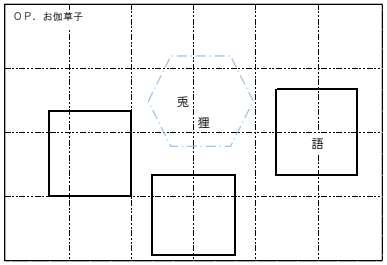
お伽草子　より

本作品は二次創作脚本になります。一次著作権である作者の権利は消滅していますが、二次著作権として作者の権利が発生しており、本作品の二次著作権は、脚本化した菊池亮太に帰属しています。上演や公開、転載をご希望される場合は有償無償に関わらず、必ず一か月前までに作者、又は作者所属劇団までお問い合わせ下さい。
上演希望の際は、確認次第、台本データを編集可能な形式でお送り致します。
上演に際しまして、演出や脚本の改編は問いません。
《上演料金の例　劇場席数×公演回数×チケット前売り料金（単位：円）×５％》
尚、上演料金が無償の場合は、チケット前売り料金に０を代入します。
印刷された台本の落丁、汚れ、誤字等による交換等は致しかねます。ご了承下さい。
不都合のある場合はメール、又は劇団ＨＰよりお問い合わせ頂ければ、確認次第、改訂版のデータをお送りさせて頂きます。
その他、ご不明な点やご質問等のお問い合わせは下記アドレスまでお寄せ下さい。

劇団　身体言語　Body Language Artists Company
メールアドレス　kikuchimethod@outlook.jp







OP．お伽草子

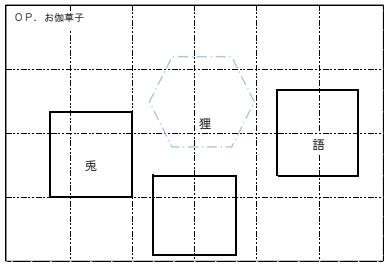
舞台にそれぞれ高さが違う三つの島
それらは照明に照らされ誇張されている
中央には楽器が陣を組んでいる、やや薄暗い
俳優が楽器ブースに入場し演奏を始める

演奏　約５分
演奏終了
語り手、上手に移動

一

語り手、登場

語り手　カチカチ山の物語に於けるウサギは少女、そうしてあの惨めな敗北を喫するタヌキは、そのウサギの少女を恋している醜男。これはもう疑いを容れぬ厳然（げんぜん）たる事実のように私には思われる。これは甲州、富士五湖の一つの河口湖畔（かわぐちこはん）、いまの船津の裏山あたりで行われた事件であるという。甲州の人情は、荒っぽい。そのせいか、この物語も、他のお伽噺に較（くら）べて、いくぶん荒っぽく出来ている。だいいち、どうも、物語の発端からして酷だ。婆汁（ばばじる）なんてのは、ひどい。お道化にも洒落にもなってやしない。タヌキも、つまらない悪戯をしたものである。縁の下に婆さんの骨が散らばっていたなんて段に到ると、まさに陰惨（いんさん）の極度であって、所謂児童読物（じどうしょもつ）としては、遺憾ながら発売禁止の憂目に遭わざるを得ないところであろう。現今発行せられているカチカチ山の絵本は、それゆえ、タヌキが婆さんに怪我をさせて逃げたなんて工合に、賢明にごまかしているようである。それはまあ、発売禁止も避けられるし、大いによろしい事であろうが、しかし、たったそれだけの悪戯に対する懲罰としてはどうも、ウサギの仕打は、執拗（しつよう）すぎる。一撃のもとに倒すというような颯爽たる仇討ちではない。生殺しにして、なぶって、なぶって、そうして最後は泥舟でぶくぶくである。その手段は、一から十まで詭計（きけい）で



ある。これは日本の武士道の作法ではない。しかし、タヌキが婆汁などというあくどい欺術を行ったのならば、その返報として、それくらいの執拗のいたぶりを受けるのは致し方の無いところでもあろうと合点のいかない事もないのであるが、童心に与える影響ならびに発売禁止のおそれを顧慮して、タヌキが単に婆さんに怪我をさせて逃げた罰としてウサギからあのようなかずかずの恥辱と苦痛と、やがて不体裁極まる溺死とを与えられるのは、いささか不当のようにも思われる。もともとこのタヌキは、何の罪科も無く、山でのんびり遊んでいたのを、爺さんに捕えられ、そうしてタヌキ汁にされるという絶望的な運命に到達し、それでも何とかして一条の血路を切りひらきたく、もがき苦しみ、窮余の策として婆さんを欺き、九死に一生を得たのである。婆汁なんかをたくらんだのは大いに悪いが、しかし、このごろの絵本のように、逃げるついでに婆さんを引掻いて怪我させたくらいの事は、タヌキもその時は必死の努力で、いわば正当防衛のために無我夢中であがいて、意識せずに婆さんに怪我を与えたのかも知れないし、それはそんなに憎むべき罪でも無いように思われる。

ウサギ、登場

語り手 私の家の五歳の娘は、器量も父に似て頗るまずいが、頭脳もまた不幸にも父に似て、へんなところがあるようだ。私が防空壕の中で、このカチカチ山の絵本を読んでやったら、

ウサギ タヌキさん、可哀想ね。

語り手 と意外な事を口走った。もっとも、この娘の

ウサギ 可哀想

語り手 は、このごろの彼女の一つ覚えで、何を見ても

ウサギ 可哀想

語り手 を連発し、以て子に甘い母の称讃を得ようという下心が露骨に見え透いているのであるから、格別おどろくには当らない。

ウサギ 可哀想

語り手 或いは、この子は、父に連れられて近所の井の頭動物園に行った時、檻の中を絶えずチョコチョコ歩きまわっているタヌキの一群を眺め、愛すべき動物であると思い込み、それゆえ、このカチカチ山の

物語に於いても、理由の如何を問はず、タヌキに贔屓(ひいき)していたのかも知れない。

ウサギ 可哀想

語り手 いずれにしても、わが家の小さい同情者の言(ことば)は、あまりあてにならない。思想の根拠が、薄弱である。同情の理由が、朦朧としている。どだい、何も、問題にする価値が無い。しかし私は、その娘の無責任きわまる放言を聞いて、或る暗示を与えられた。この子は、何も知らずにただ、このごろ覚えた言葉を出鱈目に呟いただけの事であるが、しかし、父はその言葉に依って、なるほど、これでは少しウサギの仕打がひどすぎる、こんな小さい子供たちなら、まあ何とか言ってごまかせるけれども、もっと大きい子供で、武士道とか正々堂々とかの観念を既に教育せられている者には、このウサギの懲罰は所謂「やりかたが汚い」と思われはせぬか、これは問題だ、と愚かな父は眉をひそめたというわけである。

ウサギ タヌキさん、可哀想ね。

語り手 このごろの絵本のように、タヌキが婆さんに単なる引掻き傷を与えたくらいで、このようにウサギに意地悪く翻弄せられ、背中は焼かれ、その焼かれた個所には唐辛子を塗られ、あげくの果には泥舟に乗せられて殺されるという悲惨の運命に立ち到るという筋書では、国民学校にかよっているほどの子供ならば、すぐに不審を抱くであろう事は勿論、よしんばタヌキが、不埒な婆汁などを試みたとしても、なぜ正々堂々と名乗りを挙げて彼に膺懲(ようちょう)の一太刀を加えなかったか。ウサギが非力であるから、などはこの場合、弁解にならない。

ウサギ、木刀を取り出す

語り手 仇討ちは須く正々堂々たるべきである。神は正義に味方する。かなわぬまでも、

ウサギ 天誅！

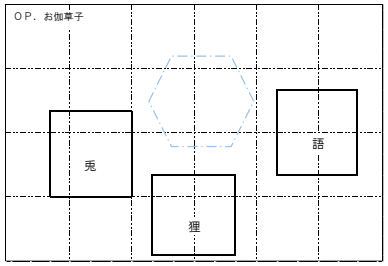
語り手 天誅！ と一声叫んで真正面からおどりかかって行くべきである。あまりにも腕前の差がひどかったならば、その時には臥薪嘗胆(がしんしょうたん)、鞍馬山(くらまやま)にでも入って一心に剣術の修行をする事だ。

ウサギ、臥薪嘗胆、励みだす

語り手 昔から日本の偉い人たちは、たいていそれをやっている。いかなる事情があろうと、詭計を用いて、しかもなぶり殺しにするなどという仇討物語は、日本に未だ無いようだ。それをこのカチカチ山ばかりは、どうも、その仇討の仕方が芳(かんば)しくない。どだい、男らしくないじゃないか、と子供でも、また大人でも、いやしくも正義にあこがれている人間ならば、誰でもこれに就(つ)いてはいささか不快の情を覚えるのではあるまいか。安心し給え。私もそれに就いて、考えた。そうして、ウサギのやり方が男らしくないのは、それは当然だという事がわかった。このウサギは男じゃないんだ。それは、たしかだ。このウサギは十六歳の処女だ。いまだ何も、色気は無いが、しかし、美人だ。そうして、人間のうちで最も残酷(ざんこく)なのは、えてして、このたちの女性である。ギリシヤ神話には美しい女神がたくさん出て来るが、その中でも、ヴィーナスを除いては、アルテミスという処女神(しょじょしん)が最も魅力ある女神とせられているようだ。ご承知のように、アルテミスは月の女神で、額には青白い三日月が輝き、そうして敏捷(びんしょう)できかん気で、一口で言えばアポロンをそのまま女にしたような神である。そうして下界のおそろしい猛獣は全部この女神の家来である。けれども、その姿態は決して荒くれて岩乗な大女ではない。むしろ小柄で、ほっそりとして、手足も華奢で可愛く、ぞっとするほどあやしく美しい顔をしているが、しかし、ヴィーナスのような「女らしさ」が無く、乳房も小さい。

ウサギ、怒る

語り手 気にいらぬ者には平気で残酷な事をする。自分の水浴しているところを覗き見した男に、颯つと水をぶっかけて鹿にしてしまった事さえある。水浴の姿をちらと見ただけでも、そんなに怒るのである。手なんか握られたら、どんなにひどい仕返しをするかわからない。こんな女に惚れたら、男は惨憺たる大恥辱を受けるにきまっている。けれども、男は、それも愚鈍の男ほど、こんな危険な女性に惚れ込み易いものである。そうして、その結果は、たいていきまっているのである。



疑うものは、この気の毒なタヌキを見るがよい。タヌキは、そのようなアルテミス型のウサギの少女に、かねてひそかに思慕（しぼ）の情を寄せていたのだ。ウサギが、このアルテミス型の少女だったと規定すると、あのタヌキが婆汁か引掻き傷かいづれの罪を犯した場合でも、その懲罰が、へんに意地くね悪く、そうして「男らしくない」のが当然だと、溜息と共に首肯（しゅこう）せられなければならぬわけである。しかも、このタヌキたるや、アルテミス型の少女に惚れる男のご多聞に漏れず、タヌキ仲間でも風采あがらず、ただ団々として、愚鈍大食の野暮天であったというに於いては、その悲惨のなり行きは推（さつ）するに余りがある。

二

タヌキ、登場

語り手　タヌキは爺さんに捕えられ、もう少しのところでタヌキ汁にされるところであったが、あのウサギの少女にひとめまた逢いたくて、大いにあがいて、やっと逃れて山へ帰り、ぶつぶつ何か言いながらうろうろウサギを捜し歩き、やっと見つけて、

タヌキ　よろこんでくれ！　おれは命拾いをしたぞ。爺さんの留守をねらって、あの婆さんを、えい、とばかりにやっつけて逃げて来た。おれは運の強い男さ。

語り手　と得意満面、このたびの大厄難（だいやくなん）突破の次第を、唾を飛ばし散らしながら物語る。ウサギはぴょんと飛びしりぞいて唾を避け、ふん、といったような顔つきで話を聞き、

ウサギ　何も私が、よろこぶわけは無いじゃないの。きたないわよ、そんなに唾を飛ばして。それに、あの爺さん婆さんは、私のお友達よ。知らなかったの？

タヌキ　そうか、知らなかった。かんべんしてくれ。そうと知っていたら、おれは、タヌキ汁にでも何にでも、なってやったのに。

ウサギ　いまさら、そんな事を言ったって、もうおそいわ。あのお家の庭先に私が時々あそびに行って、そうして、おいしいやわらかな豆なんかごちそうになったのを、あなただって知ってたじゃないの。それだのに、知らなかったなんて嘘ついて、ひどいわ。あなたは、私の

敵よ。

タヌキ ゆるしてくれよ。おれは、ほんとに、知らなかったのだ。嘘なんかつかない。信じてくれよ。

語り手 と、いやにねばっこい口調で歎願(たんがん)して、頸を長くのばしてうなだれて見せて、傍に木の実が一つ落ちているのを見つけ、ひょいと拾って食べて、もっと無いかとあたりをきょろきょろ見廻しながら、

タヌキ 本当にもう、お前にそんなに怒られると、おれはもう、死にたくなるんだ。

ウサギ 何を言ってるの。食べる事ばかり考えてるくせに。助平の上に、また、食い意地がきたないったらありゃしない。

タヌキ 見のがしてくれよ。おれは、腹がへっているんだ。

語り手 となおもその辺を、うろうろ捜し廻りながら、

タヌキ まったく、いまのおれのこの心苦しさが、お前にわかってもらえたらなぁ。

ウサギ 傍へ寄って来ちゃ駄目だって言ったら。くさいじゃないの。もっとあっちへ離れてよ。あなたは、とかげを食べたんだってね。私は聞いたわよ。それから、ああ可笑しい、ウンコも食べたんだってね。

タヌキ まさか。

語り手 とタヌキは力弱く苦笑した。それでも、なぜだか、強く否定する事の能わざる様子で、さらにまた力弱く、

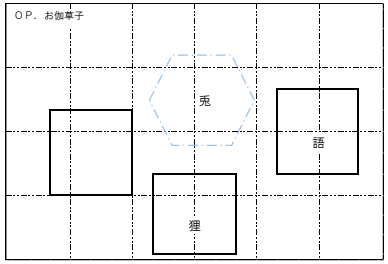
タヌキ まさかねぇ。

語り手 と口を曲げて言うだけであった。

ウサギ 上品ぶったって駄目よ。あなたのそのにおいは、ただの臭みじゃないんだから。

語り手 とウサギは平然と手きびしい引導を渡して、それから、ふいと別の何か素晴らしい事でも思いついたらしく急に眼を輝かせ、笑ひを噛み殺しているような顔つきでタヌキのほうに向き直り、

ウサギ それじゃあね、こんどいっぺんだけ、ゆるしてあげる。あれ、寄って来ちゃ駄目だって言うのに。油断もすきもなりゃしない。よだれを拭いたらどう？　下顎がべろべろしてるじゃないの。落ついて、よくお聞き。こんどいっぺんだけは特別にゆるしてあげるけれど、でも、条件があるのよ。あの爺さんは、いまごろはきっとひどく落胆して、山に柴刈りに行く気力も何も無くなっているでしょうから、私たちはその代りに柴刈りに行ってあげましょうよ。



タヌキ 一緒に？　お前も一緒に行くのか？

語り手 タヌキの小さい濁った眼は歓喜に燃えた。

ウサギ おいや？

タヌキ いやなものか。今日これから、すぐに行こうよ。

ウサギ あしたにしましょう、ね、あしたの朝早く。今日はあなたもお疲れでしょうし、それに、おなかも空いているでしょうから。

タヌキ ありがたい！　おれは、あしたお弁当をたくさん作って持って行って、一心不乱に働いて十貫目の柴を刈って、そうして爺さんの家へとどけてあげる。そうしたら、お前は、おれをきっと許してくれるだろうな。仲よくしてくれるだろうな。

ウサギ くどいわね。その時のあなたの成績次第でね。もしかしたら、仲よくしてあげるかも知れないわ。

ウサギ、退場

タヌキ えへへ、その口が憎いや。苦労させるぜ、こんちきしょう。おれは、もう、

語り手 と言いかけて、這い寄って来た大きい蜘蛛を素早くぺろりと食べ、

タヌキ おれは、もう、どんなに嬉しいか、いっそ、男泣きに泣いてみたいくらいだ。

語り手 と鼻をすすり、嘘泣きをした。

ウサギ、演奏

三

語り手 夏の朝は、すがすがしい。河口湖の湖面は朝霧に覆われ、白く眼下に烟（けむ）っている。山頂ではタヌキとウサギが朝露を全身に浴びながら、せっせと柴を刈っている。

タヌキの働き振りを見るに、一心不乱どころか、ほとんど半狂乱に近いあさましい有様である。

タヌキ ううむ、ううむ、

語り手 と大袈裟に唸りながら、めちゃ苦茶に鎌を振りまわして、時々、

タヌキ あいたたたた、

語り手　などと聞えよがしの悲鳴を挙げ、ただもう自分がこのように苦心（くしん）惨憺（さんたん）しているというところをウサギに見てもらいたげの様子で、縦横無尽に荒れ狂う。ひとしきり、そのように凄まじくあばれて、さすがにもうだめだ、というような疲れ切った顔つきをして鎌を投げ捨て、

タヌキ　これ、見ろ。手にこんなに豆が出来た。ああ、手がひりひりする。のどが乾く。おなかも空いた。とにかく、大労働だったからなぁ。ちょっと休息という事にしょうじゃないか。お弁当でも開きましょうかね。うふふふ。

語り手　とてれ隠しみたいに妙に笑って、大きいお弁当箱を開く。ぐいとその石油缶ぐらいの大きさのお弁当箱に鼻先を突込んで、むしやむしや、がつがつ、ぺつぺつ、という騒々しい音を立てながら、それこそ一心不乱に食べている。ウサギはあっけにとられたような顔をして、柴刈りの手を休め、ちょっとそのお弁当箱の中を覗いて、あ！　と小さい叫びを挙げ、両手で顔を覆った。何だか知れぬが、そのお弁当箱には、すごいものが入っていたようである。けれども、今日のウサギは、何か内証の思惑（おもわく）でもあるのか、いつものようにタヌキに向って侮辱の言葉も吐かず、先刻から無言で、ただ技巧的な微笑を口辺に漂わせてせっせと柴を刈っているばかりで、お調子に乗ったタヌキのいろいろな狂態をも、知らん振りして見のがしてやっているのである。タヌキの大きいお弁当箱の中を覗いて、ぎょっとしたけれども、やはり何も言わず、肩をきゅっとすくめて、またもや柴刈りに取かかる。タヌキはウサギに今日はひどく寛大に扱はれるので、ただもうほくほくして、

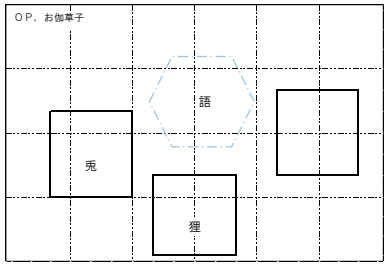
タヌキ　とうとうやっこさんも、おれのさかんな柴刈姿には惚れ直したかな？　おれの、この、男らしさには、まいらぬ女もあるまいて、ああ、食った、眠くなった、どれ一眠り、

語り手　などと全く気をゆるしてわがままいっぱいに振舞い、ぐうぐう大鼾を掻いて寝てしまった。眠りながらも、何のたわけた夢を見ているのか、

タヌキ　惚れ薬ってのは、あれは駄目だぜ、きかねぇや、

語り手　などわけのわからぬ寝言を言い、眼をさましたのは、お昼ちかく。

語り手、退場



ウサギ、登場

ウサギ ずいぶん眠ったのね。もう私も、柴を一束こしらえたから、これから背負って爺さんの庭先まで持って行ってあげましょうよ。

タヌキ ああ、そうしよう。（大あくびしながら腕をぽりぽり掻いて）やけにおなかが空いた。こうおなかが空くと、もうとても、眠って居られるものじゃない。おれは敏感なんだ。どれ、それではおれも刈った柴を大急ぎで集めて、下山としようか。お弁当も、もう、からになったし、この仕事を早く片づけて、それからすぐに食べ物を捜さなくちゃいけない。

二人はそれぞれ刈った柴を背負って、帰途につく。

ウサギ あなた、さきに歩いてよ。この辺には、蛇がいるんで、私こわくて。

タヌキ 蛇？　蛇なんてこわいもんか。見つけ次第おれがとって、（食べる、と言いかけて、口ごもり）おれがとって、殺してやる。さあ、おれのあとについて来い。

ウサギ やっぱり、男のひとって、こんな時にはたのもしいものねぇ。

ウサギ、火打石を取り出す

タヌキ おだてるなよ。（とやにさがり）今日はお前、ばかにしおらしいじゃないか。気味がわるいくらいだぜ。

タヌキ、振り向く
ウサギ、慌てて火打石を後ろに隠す

タヌキ まさか、おれをこれから爺さんのところに連れて行って、タヌキ汁にするわけじゃあるまいな。あははは。そいつばかりは、ごめんだぜ。

ウサギ あら、そんなにへんに疑うなら、もういいわよ。私がひとりで行くわよ。

タヌキ いや、そんなわけじゃない。一緒に行くがね、（前を向いて）おれは蛇だって何だってこの世の中にこわいものなんかありゃしない

が、どうもあの爺さんだけは苦手だ。タヌキ汁にするなんて言いやがるから、いやだよ。どだい、下品じゃないか。少くとも、いい趣味じゃない（カチカチ）と思うよ。おれは、あの爺さんの庭先の手前の一本榎のところまで、この柴を背負って行くから、あとはお前が運んでくれよ。（カチカチ）おれは、あそこで失敬しょうと思うんだ。どうもあの爺さんの顔を見ると、おれは何とも言えず不愉快になる。（カチカチ）おや？　何だい、あれは。へんな音がするね。なんだろう。お前にも、聞えないか？　何だか、（カチカチ）カチ、カチ、と音がする。

ウサギ　当り前じゃないの？　ここは、（カチカチ）カチカチ山だもの。

タヌキ　カチカチ山？　ここがかい？

ウサギ　ええ、知らなかったの？

タヌキ　うん。知らなかった。この山に、そんな名前があるとは今日まで知らなかったね。（カチカチ）しかし、へんな名前だ。嘘じゃないか？

ウサギ　あら、だって、山にはみんな名前があるものでしょう？　あれが富士山だし、あれが長尾山だし、あれが大室山だし、みんなに名前があるじゃないの。だから、この山はカチカチ山っていう名前なのよ。ね、ほら、（カチカチ）カチ、カチって音が聞こえる。

タヌキ　うん、聞こえる。しかし、へんだな。いままで、おれはいちども、この山でこんな音を聞いた事が無い。この山で生れて、三十何年かになるけれども、こんな、――

ウサギ　まあ！　あなたは、もうそんな年なの？　こなひだ私に十七だなんて教えたくせに、ひどいじゃないの。顔が皺くちゃで、腰も少し曲っているのに、十七とは、へんだと思っていたんだけど、それにしても、二十も年をかくしているとは思わなかったわ。それじゃあなたは、四十ちかいんでしょう、まあ、ずいぶんね。

タヌキ　いや十七だ、十七。十七なんだ。おれがかう腰をかがめて歩くのは、決してとしのせいじゃないんだ。おなかが空いているから、自然にこんな恰好になるんだ。三十何年、というのは、あれは、（カチカチ）おれの兄の事だよ。兄がいつも口癖のようにそう言うので、つい、おれも、うっかり、あんな事を口走ってしまったんだ。つまり、ちょっと伝染したってわけさ。そんなわけなんだよ、君。

ウサギ　そうですか。（カチカチ）でも、あなたにお兄さんがあるなんて、はじめて聞いたわ。あなたはいつか私に、おれは淋しいんだ、孤独

なんだよ、親も兄弟も無い、この孤独の淋しさが、お前、わからんかね、（カチカチ）なんておっしゃってたじゃないの。あれは、どういうわけなの？

タヌキ そう、そう、（自分でも何を言っているのか、わからなくなり）まったく世の中は、これでなかなか複雑なものだからねぇ、そんなに一概には行かないよ。兄があったり無かったり。（カチカチ）

ウサギ まるで、意味が無いじゃないの。（さすがに呆れ果て）めちゃ苦茶ね。

ウサギ、火打石をしまう

タヌキ うん、実はね、兄はひとりあるんだ。これは言うのもつらいが、飲んだくれのならず者でね、おれはもう恥ずかしくて、面目なくて、生れて三十何年間、いや、兄がだよ、兄が生れて三十何年間というもの、このおれに、迷惑のかけどおしさ。

ウサギ それも、へんね。十七のひとが、三十何年間も迷惑をかけられたなんて。

タヌキ 世の中には、一口で言えない事が多いよ。いまじゃもう、おれのほうから、あれは無いものと思って、勘当して、おや？　へんだね、キナくさい。お前、なんともないか？

ウサギ いいえ。

タヌキ そうかね。（けげんな面持で頸をひねり）気のせいかなぁ。あれあれ、何だか火が燃えているような、パチパチボウボウって音がするじゃないか。

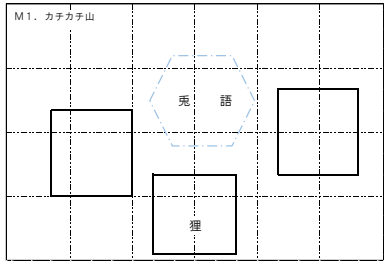
ウサギ そりゃその筈よ。ここは、パチパチのボウボウ山だもの。

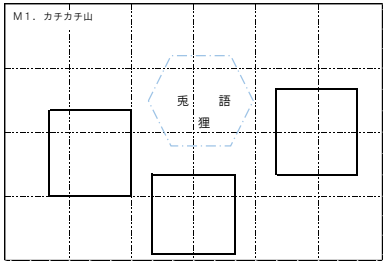
タヌキ 嘘つけ。お前は、ついさっき、ここはカチカチ山だって言った癖に。

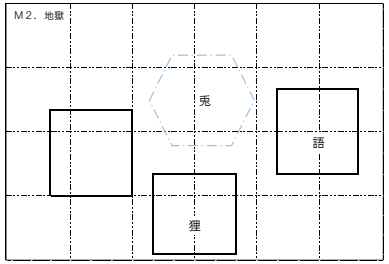
ウサギ そうよ、同じ山でも、場所に依って名前が違うのよ。富士山の中腹にも小富士という山があるし、それから大室山だって長尾山だって、みんな富士山と続いている山じゃないの。知らなかったの？

タヌキ うん、知らなかった。そうかなぁ、ここがパチパチのボウボウ山とは、おれが三十何年間、いや、兄の話に依れば、ここはただの裏山だったが、

ウサギ、退場







タヌキ いや、これは、ばかに暖くなって来た。地震でも起るんじゃねぇだろうか。何だか今日は薄気味の悪い日だ。やあ、これは、ひどく暑い。きゃあつ！　あちちちち、ひでぇ、あちちちち、助けてくれ、柴が燃えてる。あちちちち。

タヌキ、退場

M1．カチカチ山

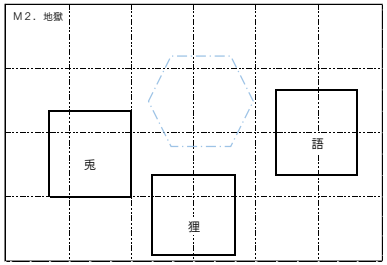
演奏　約5分
演奏終了

四

語り手、登場
続いて
タヌキ、登場

語り手 そのあくる日、

タヌキ ああ、くるしい。いよいよ、おれも死ぬかも知れねぇ。思へば、おれほど不仕合せな男は無い。なまなかに男振りが少し佳く生れて来たばかりに、女どもが、かえって遠慮しておれに近寄らない。いったいに、どうも、上品に見える男は損だ。おれを女ぎらいかと思っているのかも知れねぇ。なぁに、おれだって決して聖人じゃない。女は好きさ。それだのに、女はおれを高邁な理想主義者だと思っているらしく、なかなか誘惑してくれない。こうなればいっそ、大声で叫んで走り狂ひたい。おれは女が好きなんだ！　あ、いてぇ、いてぇ。どうも、この火傷というものは始末がわるい。づきづき痛む。やっとタヌキ汁から逃れたかと思うと、こんどは、わけのわからねぇボウボウ山とかいうのに足を踏み込んだのが、運のつきだ。あの山は、つまらねぇ山であった。柴がボウボウ燃え上るんだから、ひどい。三十何年、（と言いかけて、あたりをぎょろりと見廻し）何を隠そう、おれぁことし三十七さ、へへん、わるいか、もう三年経



てば四十だ、わかり切った事だ、理の然というものだ、見ればわかるじゃないか。あいたたた、それにしても、おれが生れてから三十七年間、あの裏山で遊んで育って来たのだが、ついぞいちども、あんなへんな目に遭った事が無い。カチカチ山だの、ボウボウ山だの、名前からして妙に出来てる。はて、不思議だ。

語り手 その時、表で行商の呼売りの声がする。

ウサギ 仙金膏（せんきんこう）はいかが。やけど、切傷、色黒に悩むかたはいないか。

語り手 タヌキは、やけど切傷よりも、色黒と聞いてはっとした。

タヌキ おういい、仙金膏。

ウサギ へえ、どちらさまで。

タヌキ こっちだ、穴の奥だよ。色黒にもきくかね。

ウサギ、登場

ウサギ それはもう、一日で。

タヌキ ほほう、（とよろこび、穴の奥からいざり出て）や！　お前は、ウサギ。

ウサギ ええ、ウサギには違いありませんが、私は男の薬売りです。ええ、もう三十何年間、この辺をこうして売り歩いています。

タヌキ ふう、

語り手 とタヌキは溜息をついて首をかしげ

タヌキ しかし、似たウサギもあるものだ。三十何年間、そうか、お前がねぇ。いや、歳月の話はよそう。糞面白くもない。しっつこいじゃないか。まあ、そんなわけのものさ。（としどろもどろのごまかし方をして）ところで、おれにその薬を少しゆずってくれないか。実はちょっと悩みのある身なのでな。

ウサギ おや、ひどい火傷ですねぇ。これは、いけない。ほって置いたら、死にますよ。

タヌキ いや、おれはいっそ死にてぇ。こんな火傷なんかどうだっていいんだ。それよりも、おれは、いま、その、容貌の、――

ウサギ 何を言っていらっしゃるんです。生死の境じゃありませんか。やあ、背中がいちばんひどいですね。いったい、これはどうしたのです。

タヌキ それがねぇ、（とタヌキは口をゆがめて）パチパチのボウボウ山とかいうきざな名前の山に踏み込んだばっかりにねぇ、いやもう、と

んだ事になってねぇ、おどろきましたよ。

まったくねぇ。ばかばかしいったらありゃしないのさ。お前にも忠告して置きますがね、あの山へだけは行っちゃいけないぜ。はじめ、カチカチ山というのがあって、それからいよいよパチパチのボウボウ山という事になるんだが、あいつぁいけない。ひでぇ事になっちゃう。まあ、いい加減に、カチカチ山あたりでごめんこうむって来るんですな。へたにボウボウ山などに踏み込んだが最期、かくの如き始末だ。あいててて。いいですか。忠告しますよ。お前はまだ若いようだから、おれのような年寄りの言は、いや、年寄りでもないが、とにかく、ばかにしないで、この友人の言だけは尊重して下さいよ。何せ、体験者の言なのだから。あいてててて。

語り手 ウサギは思わず、くすくす笑ってしまった。タヌキは、ウサギがなぜ笑ったのかわからなかったが、とにかく自分も一緒に、あははと笑い、

ウサギ、語り手、大笑い
タヌキ、とにかく一緒に笑う
語り手、退場

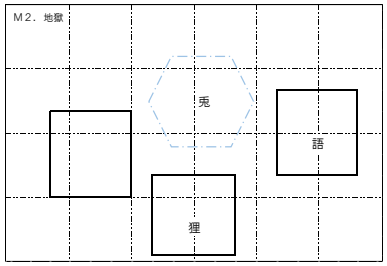
ウサギ ありがとうございます。気をつけましょう。ところで、どうしましょう、お薬は。御深切な忠告を聞かしていただいたお礼として、お薬代は頂戴いたしません。とにかく、その背中の火傷に塗ってあげましょう。ちょうど折よく私が来合せたから、よかったようなものの、そうでもなかったら、あなたはもう命を落すような事になったかも知れないのです。これも何かのお導きでしょう。縁ですね。

タヌキ 縁かも知れねぇ。（とタヌキは低く呻くように言い）ただなら塗ってもらおうか。おれもこのごろは貧乏でな、どうも、女に惚れると金がかかっていけねぇ。ついでにその膏薬を一滴おれの手のひらに載せて見せてくれねぇか。

ウサギ どうなさるのです。

タヌキ いや、はあ、なんでもねぇ。ただ、ちょっと見たいんだよ。どんな色合いのものだかな。

ウサギ 色は別に他の膏薬（こうやく）とかわってもいませんよ。こんなものですが。



とほんの少量を、タヌキの差出す手のひらに載せてやる
タヌキは素早くそれを顔に塗ろうとしたのでウサギは驚き、
そんな事でこの薬の正体が暴露してはかなわぬと、タヌキ
の手を遮り

ウサギ あ、それはいけません。顔に塗るには、その薬は少し強すぎます。とんでもない。

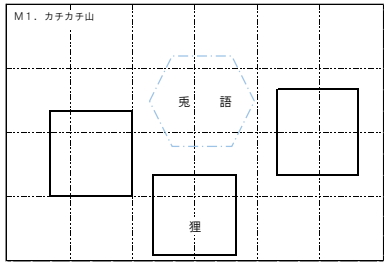
タヌキ いや、放してくれ。後生だから手を放せ。お前にはおれの気持がわからないんだ。おれはこの色黒のため生れて三十何年間、どのように味気ない思いをして来たかわからない。放せ。手を放せ。後生だから塗らせてくれ。

ウサギ ついにタヌキは足を挙げてウサギを蹴飛ばし、眼にもとまらぬ早さで薬をぬたくり、

タヌキ 少くともおれの顔は、目鼻立ちは決して悪くないと思うんだ。ただ、この色黒のために気がひけていたんだ。もう大丈夫だ。うわっ！これは、ひどい。どうもひりひりする。強い薬だ。しかし、これくらいの強い薬でなければ、おれの色黒はなおらないような気もする。わあ、ひどい。しかし、我慢するんだ。ちきしょうめ、こんどあいつが、おれと逢った時、うっとりおれの顔に見とれて、うふふ、おれはもう、あいつが、恋わずらいしたって知らないぞ。おれの責任じゃないからな。ああ、ひりひりする。この薬は、たしかに効く。さあ、もうこうなったら、背中にでもどこにでも、からだ一面に塗ってくれ。おれは死んだってかまはん。色白にさえなったら死んだってかまはんのだ。さあ塗ってくれ。遠慮なくべたべたと威勢よくやってくれ。

ウサギ、タヌキの背中にれいの
唐辛子をねったものをこってりと塗る
語り手、登場

語り手 まことに悲壮な光景になって来た。
けれども、美しく高ぶった処女の残忍性には限りが無い。ほとんどそれは、悪魔に似ている。平然と立ち上って、タヌキの火傷にれいの唐辛子をねったものをこってりと塗る。



タヌキ、たちまち、七転八倒、

語り手、退場

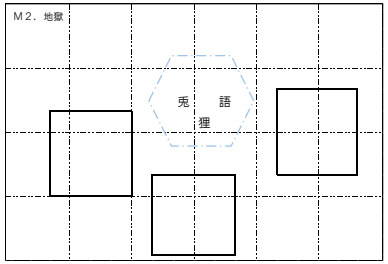
タヌキ ううむ、何ともない。この薬は、たしかに効く。わああ、ひどい。水をくれ。ここはどこだ。地獄か。かんにんしてくれ。おれは地獄へ落ちる覚えは無えんだ。おれはタヌキ汁にされるのがいやだったから、それで婆さんをやっつけたんだ。おれに、咎(とが)は無えのだ。おれは生れて三十何年間、色が黒いばっかりに、女にいちども、もてやしなかったんだ。それから、おれは、食慾が、ああ、そのために、おれはどんなにきまりの悪い思いをして来たか。誰も知りやしないのだ。おれは孤独だ。おれは善人だ。眼鼻立ちは悪くないと思うんだ。

タヌキ、退場

M2．地獄

演奏　約3分

演奏終了

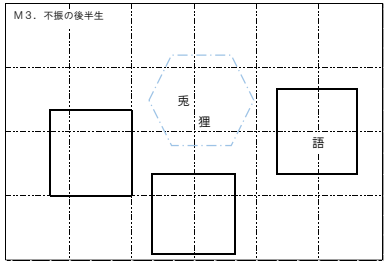


五

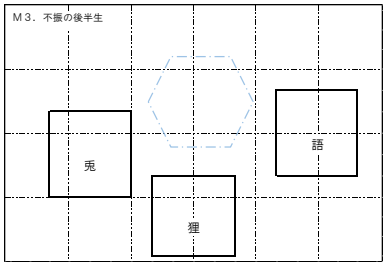
語り手、登場

語り手 しかし、タヌキの不幸は、まだ終らぬ。

M3．不振の後半生



語り手 作者の私でさえ、書きながら溜息が出るくらいだ。おそらく、日本の歴史に於いても、これほど不振の後半生を送った者は、あまり例が無いように思われる。タヌキ汁の運命から逃れて、やれ嬉しやと思う間もなく、ボウボウ山で意味も無い大火傷をして九死に一生を得、這うようにしてどうやらわが巣にたどりつき、口をゆがめて



呻吟していると、こんどはその大火傷に唐辛子をべたべた塗られ、苦痛のあまり失神し、さて、それからいよいよ泥舟に乗せられ、河口湖底（かこうこてい）に沈むのである。実に、何のいいところも無い。これもまた一種の女難にちがい無かろうが、しかし、それにしても、あまりに野暮な女難である。粋なところが、ひとつも無い。彼は穴の奥で三日間は虫の息で、生きているのだか死んでいるのだか、それこそ全く幽明（ゆうめい）の境をさまよい、四日目に、猛烈の空腹感に襲われ、杖をついて穴からよろばい出て、何やらぶつぶつ言いながら、かなたこなた食い捜して歩いているその姿の気の毒さと来たら比類が無かった。しかし、根が骨太の岩乗なからだであったから、十日も経たぬうちに全快し、食慾は旧の如く旺盛で、色慾などもちょっと出て来て、よせばよいのに、またもやウサギの庵にのこのこ出かける。遊びに来ましたよ。うふふ。

ウサギ、登場
タヌキ、登場

タヌキ 遊びに来ましたよ。うふふ。

ウサギ あら！

語り手 とウサギは言い、ひどく露骨にいやな顔をした。なぁんだ、あなたなの？　という気持、いや、それよりもひどい。なんだってまたやって来たの、図々しいじゃないの、という気持、いや、それよりもなおひどい。ああ、たまらない！　厄病神が来た！　という気持、いや、それよりも、もっとひどい。きたない！　くさい！　死んぢまへ！　というような極度の嫌悪が、その時のウサギの顔にありありと見えているのに、しかし、とかく招かれざる客というものは、その訪問先の主人の、こんな憎悪感に気附く事はなはだ疎いものである。

タヌキ や、ありがとう。（お見舞ひも何も言われぬくせに、こちらから御礼を述べ）心配無用だよ。もう大丈夫だ。おれには神さまがついているんだ。運がいいのだ。あんなボウボウ山なんて屁の河童さ。河童の肉は、うまいそうで。何とかして、そのうち食べてみようと思っているんだがね。それは余談だが、しかし、あの時は、驚いたよ。何せどうも、たいへんな火勢だったからね。お前のほうは、どうだ

ったね。べつに怪我も無い様子だが、よくあの火の中を無事で逃げて来られたね。

ウサギ 無事でもないわよ。(ウサギはつんとすねて見せて)あなたったら、ひどいじゃないの。あのたいへんな火事場に、私ひとりを置いてどんどん逃げて行ってしまうんだもの。私は煙にむせて、もう少しで死ぬところだったのよ。私は、あなたを恨んだわ。やっぱりあんな時に、つい本心というものがあらわれるものらしいのね。私には、もう、あなたの本心というものが、こんど、はっきりわかったわ。

タヌキ すまねぇ。かんにんしてくれ。実はおれも、ひどい火傷をして、おれには、ひょっとしたら神さまも何もついていねぇのかも知れない、さんざんの目に遭っちゃったんだ。お前はどうなったか、決してそれを忘れていたわけじゃなかったんだが、何せどうも、たちまちおれの背中が熱くなって、お前を助けに行くひまも何も無かったんだよ。わかってくれねぇかなぁ。おれは決して不実な男じゃねぇのだ。火傷ってやつも、なかなか馬鹿にできねぇものだぜ。それに、あの、仙金膏とか、疝気膏とか、あいつあ、いけない。いやもう、ひどい薬だ。色黒にも何もききやしない。

ウサギ 色黒？

タヌキ いや、何。どろりとした黒い薬でね、こいつあ、強い薬なんだ。お前によく似た、小さい、奇妙な野郎が薬代は要らねぇ、と言うから、おれもつい、ものはためしだと思って、塗ってもらう事にしたのだが、いやはやどうも、ただの薬ってのも、あれはお前、気をつけたほうがいいぜ、油断も何もなりやしねぇ、おれはもう頭のてっぺんからキリキリと小さい竜巻が立ち昇ったような気がして、どうとばかりに倒れたんだ。

ウサギ ふん、(とウサギは軽蔑し) 自業自得じゃないの。ケチンボだから罰が当ったんだわ。ただの薬だから、ためしてみたなんて、よくもまあそんな下品な事を、恥ずかしくもなく言えたものねぇ。

タヌキ ひでぇ事を言う。

語り手 とタヌキは低い声で言い、けれども、別段何も感じないらしく、ただもう好きなひとの傍にいるという幸福感にぬくぬくとあたたまっている様子で、どっしりと腰を落ちつけ、死魚のように濁った眼であたりを見廻し、小虫を拾って食べたりしながら、

タヌキ しかし、おれは運のいい男だなぁ。どんな目に遭っても、死にやし

ない。神さまがついているのかも知れねぇ。お前も無事でよかったが、おれも何という事もなく火傷がなおって、こうしてまた二人でのんびり話が出来るんだものなぁ。ああ、まるで夢のようだ。

語り手 ウサギはもうさつきから、早く帰ってもらいたくてたまらなかった。いやでいやで、死にそうな気持。何とかしてこの自分の庵の附近から去ってもらいたくて、またもや悪魔的の一計を案出する。

ウサギ ね、あなたはこの河口湖に、そりゃおいしい鮒がうようよいる事をご存じ？

タヌキ 知らねぇ。ほんとかね。（とタヌキは、たちまち眼をかがやかして）おれが三つの時、おふくろが鮒を一匹捕って来ておれに食べさせてくれた事があったけれども、あれはおいしい。おれはどうも、不器用というわけではないが、決してそういうわけではないが、鮒なんて水の中のものを捕まえる事が出来ねぇので、どうも、あいつはおいしいという事だけは知っていながら、それ以来三十何年間、いや、ははは、つい兄の口真似をしちゃった。兄も鮒は好きでなぁ。

語り手 そうですかね。とウサギは上の空で合槌を打ち、

ウサギ 私はどうも、鮒など食べたくもないけれど、でも、あなたがそんなにお好きなのならば、これから一緒に捕りに行ってあげてもいいわよ。

タヌキ そうかい。

語り手 とタヌキはほくほくして、

タヌキ でも、あの鮒ってやつは、素早いもんでなぁ、おれはあいつを捕まえようとして、も少しで土左衛門になりかけた事があるけれども、

語り手 とつい自分の過去の失態を告白し、

タヌキ お前に何かいい方法があるのかね。

ウサギ 網（あみ）で掬（すく）ったら、わけは無いわ。あのうが島の岸にこのごろとても大きい鮒が集っているのよ。ね、行きましょう。あなた、舟は？　漕げるの？

タヌキ うむ、（幽かな溜息をついて）漕げないことも無いがね。その気になりゃ、なぁに。

ウサギ 漕げるの？　（それが法螺だという事を知っていながら、わざと信じた振りをして）じゃ、ちょうどいいわ。私にはね、小さい舟が一艘（そう）あるけど、あんまり小さすぎて私たちふたりは乗れないの。それに何せ薄い板切れでいい加減に作った舟だから、水がしみ込んで

来て危いのよ。でも、私なんかどうなったって、あなたの身にもしもの事があってはいけないから、あなたの舟をこれから、ふたりで一緒に力を合せて作りましょうよ。板切れの舟は危いから、もっと岩乗に、泥をこねって作りましょうよ。

タヌキ すまねぇなぁ。おれはもう、泣くぜ。泣かしてくれ。おれはどうしてこんなに涙もろいか。（と言って嘘泣きをしながら）ついでにお前ひとりで、その岩乗ないい舟を作ってくれないか。な、たのむよ。（と抜からず横着な申し出をして）おれは恩に着るぜ。お前がそのおれの岩乗な舟を作ってくれている間に、おれは、ちょっとお弁当をこさえよう。おれはきっと立派な炊事係りになれるだろうと思うんだ。

ウサギ そうね。（とウサギは、このタヌキの勝手な意見をも信じた振りして素直に首肯く。そうしてタヌキは、ああ世の中なんて甘いもんだとほくそ笑む）

語り手 この間一髪に於いて、タヌキの悲運は決定せられた。自分の出鱈目を何でも信じてくれる者の胸中には、しばしば何かのおそるべき悪計が蔵（ぞう）せられているものだという事を、迂愚のタヌキは知らなかった。

ふたりはそろって湖畔に出る。白い河口湖（かわぐちこ）には波ひとつ無い。ウサギはさっそく泥をこねて、所謂岩乗な、いい舟の製作にとりかかり、タヌキは、すまねぇ、すまねぇ、と言いながら

タヌキ すまねぇ、すまねぇ

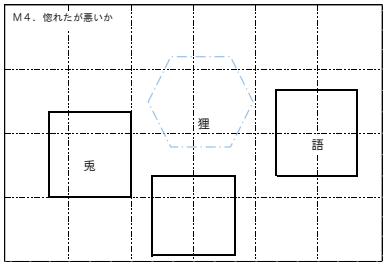
語り手 あちこち飛び廻って専ら自分のお弁当の内容調合に腐心し、夕風が微かに吹き起って湖面いっぱいに小さい波が立って来た頃、粘土の小さい舟が、つやつやと鋼鉄色に輝いて進水した。

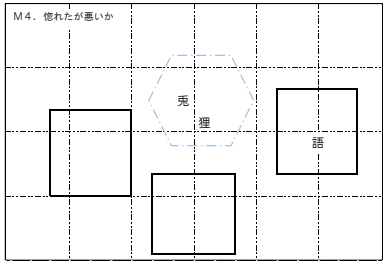
タヌキ ふむ、悪くない。

語り手 とタヌキは、はしゃいで、石油缶ぐらいの大きさの、れいのお弁当箱をまず舟に積み込み、

タヌキ お前は、しかし、ずいぶん器用な娘だねぇ。またたく間にこんな綺麗な舟一艘つくり上げてしまうのだからねぇ。神技だ。

語り手 と歯の浮くような見え透いたお世辞を言い、このように器用な働き者を女房にしたら、或いはおれは、女房の働きに依って遊んでいながら贅沢ができるかも知れないなどと、色気のほかにいまはむらむら慾気さえ出て来て、いよいよこれは何としてもこの女にくっ





ついて一生はなれぬ事だ、とひそかに覚悟のほぞを固めて、よいしょと泥の舟に乗り、

タヌキ お前はきっと舟を漕ぐのも上手だろうねぇ。おれだって、舟の漕ぎ方くらい知らないわけでは、まさか、そんな、知らないというわけでは決して無いんだが、今日はひとつ、わが女房のお手並を拝見したい。

語り手 いやに言葉遣いが図々しくなって来た。

タヌキ おれも昔は、舟の漕ぎ方にかけては名人とか、または達者とか言われたものだが、今日はまあ寝転んで拝見という事にしょうかな。かまわないから、おれの舟の舳（へさき）を、お前の舟の艫（とも）にゆわえ附けておくれ。舟も仲良くぴったりくっついて、死なばもろとも、見捨てちゃいやよ。

語り手 などといやらしく、きざったらしい事を言ってぐったり泥舟の底に寝そべる。

タヌキ、退場

語り手 ウサギは、舟をゆわえ附けよと言われて、さてはこの馬鹿も何か感づいたかな？　とぎよっとしてタヌキの顔つきを盗み見たが、何の事は無い、タヌキは鼻の下を長くしてにやにや笑いながら、もはや夢路をたどっている。鮒がとれたら起してくれ。あいつあ、うめえからなぁ。おれは三十七だよ。などと馬鹿な寝言を言っている。ウサギは、ふんと笑ってタヌキの泥舟をウサギの舟につないで、それから、櫂（かい）でぱちゃと水の面を撃つ。するすると二艘の舟は岸を離れる。

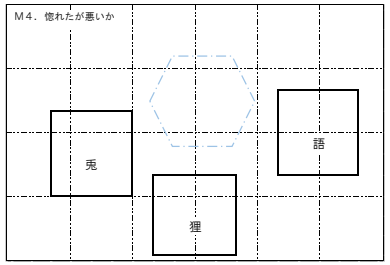
うが島の松林は夕陽を浴びて火事のようだ。

ウサギ、うが島の夕景をうっとり望見して、

ウサギ おお、いい景色。

M4．惚れたが悪いか

語り手 これは如何にも奇怪である。どんな極悪人でも、自分がこれから残



虐の犯罪を行おうというその直前に於いて、山水の美にうっとり見とれるほどの余裕なんて無いように思われるが、しかし、この十六歳の美しい処女は、眼を細めて島の夕景を観賞している。まことに無邪気と悪魔とは紙一重である。苦労を知らぬわがままな処女の、へどが出るような気障ったらしい姿態に対して、ああ青春は純真だ、なんて言って垂涎（すいぜん）している男たちは、気をつけるがよい。その人たちの所謂「青春の純真」とかいうものは、しばしばこのウサギの例に於けるが如く、その胸中に殺意と陶酔が隣合せて住んでいても平然たる、何が何やらわからぬ官能のごちゃまぜの乱舞である。危険この上ないビールの泡だ。皮膚感覚が倫理を覆っている状態、これを低能あるいは悪魔という。ひところ世界中に流行したアメリカ映画、あれには、こんな所謂「純真」な雄や雌がたくさん出て来て、皮膚感触をもてあまして擽（くすぐ）ったげにちょこまか、バネ仕掛けの如く動きまわっていた。別にこじつけるわけではないが、所謂「青春の純真」というものの元祖は、或いは、アメリカあたりにあったのではなかろうかと思われるくらいだ。スキいでランラン、とかいうたぐいである。そうしてその裏で、ひどく愚劣な犯罪を平気で行っている。低能でなければ悪魔である。いや、悪魔というものは元来、低能なのかも知れない。小柄でほっそりして手足が華奢で、かの月の女神アルテミスにも比較せられた十六歳の処女のウサギも、ここに於いて一挙に頗る興味索然たるつまらぬものになってしまった。低能かい。それじゃあ仕様が無いねぇ。

タヌキ、登場

タヌキ ひやあ！

語り手 と脚下に奇妙な声が起る。わが親愛なる而して甚だ純真ならざる三十七歳の男性、タヌキ君の悲鳴である。

タヌキ 水だ、水だ。これはいかん。

ウサギ うるさいわね。泥の舟だもの、どうせ沈むわ。わからなかったの？

タヌキ わからん。理解に苦しむ。筋道が立たぬ。それは御無理というものだ。お前はまさかこのおれを、いや、まさか、そんな鬼のような、いや、まるでわからん。お前はおれの女房じゃないか。やあ、沈む。少くとも沈むという事だけは眼前の真実だ。冗談にしたって、あく

どすぎる。これはほとんど暴力だ。やあ、沈む。おい、お前どうしてくれるんだ。お弁当がむだになるじゃないか。このお弁当箱には鼬の糞でまぶした蚯蚓のマカロニなんか入っているのだ。惜しいじゃないか。あっぷ！　ああ、とうとう水を飲んじゃった。おい、たのむ、ひとの悪い冗談はいい加減によせ。おいおい、その綱を切っちゃいかん。死なばもろとも、夫婦は二世、切っても切れねぇ縁（えにし）の艫綱（ともづな）、あ、いけねぇ、切っちゃった。助けてくれ！　おれは泳ぎが出来ねぇのだ。白状する。昔は少し泳げたのだが、タヌキも三十七になると、あちこちの筋が固くなって、とても泳げやしないのだ。白状する。おれは三十七なんだ。お前とは実際、としが違いすぎるのだ。年寄りを大事にしろ！　敬老の心掛けを忘れるな！　あっぷ！　ああ、お前はいい子だ、な、いい子だから、そのお前の持っている櫂をこっちへ差しのべておくれ、おれはそれにつかまって、あいたたた、何をするんだ、痛いじゃないか、櫂でおれの頭を殴りやがって、よし、そうか、わかった！　お前はおれを殺す気だな、それでわかった。

語り手　とタヌキもその死の直前に到って、はじめてウサギの悪計を見抜いたが、既におそかった。

ぽかん、ぽかん、と無慈悲の櫂が頭上に降る。タヌキは夕陽にきらきら輝く湖面に浮きつ沈みつ、

タヌキ　あいたたた、あいたたた、ひどいじゃないか。おれは、お前にどんな悪い事をしたのだ。惚れたが悪いか。

タヌキ、死ぬ

語り手　と言って、ぐっと沈んでそれっきり。

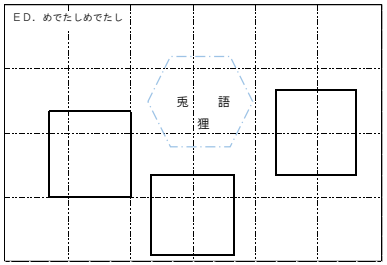
ウサギは顔を拭いて、

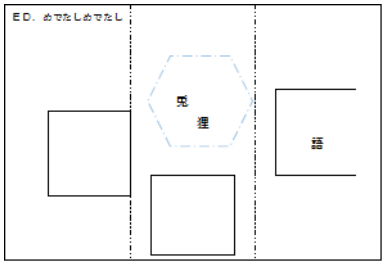
ウサギ　おお、ひどい汗。

語り手　と言った。

タヌキ、ウサギ、退場

語り手　ところでこれは、好色の戒めとでもいうものであろうか。十六歳の美しい処女には近寄るなという深切な忠告を匂はせた滑稽物語で





もあろうか。或いはまた、気にいったからとて、あまりしつこくお伺ひしては、ついには極度に嫌悪せられ、殺害せられるほどのひどいめに遭うから節度を守れ、という礼儀作法の教科書でもあろうか。

或いはまた、道徳の善悪よりも、感覚の好き嫌ひに依って世の中の人たちはその日常生活に於いて互ひに罵(ののし)り、または罰(ばつ)し、または賞(しょう)し、または服(ふく)しているものだという事を暗示している笑話であろうか。

いやいや、そのように評論家的な結論に焦躁せずとも、タヌキの死ぬるいまはの際の一言にだけ留意して置いたら、いいのではあるまいか。

曰く、惚れたが悪いか。

語り手、退場

幕